

教育再生会議の第1次報告に「社会総がかりで子供の教育にあたる。企業も教育に参画する」とあるが、企業はどう学校教育にかかわることが出来るのか？ 一つのヒントとなる事例を報告したい。

今年度、わが校では2社の企業の協力を得て、中学3年生に1年間「学校と企業によるコラボレーション授業」を行った。内容は「社会人と生徒が交流し製品を企画する」というものだった。

キャリア教育の一環で、生徒が企業と共同開発した製品を販売し、その利益でカンボジアに学校を作るなどのプロジェクトに有志が取り組んでいるが、手を挙げた一部の生徒でなく、1学年全員に授業として実施するのは初めての試みだった。有志と違い、初めからモチベーションが高い子ばかりではなく、教員も全

解答乱麻

品川女子学院校長 漆紫穂子



員がこのような取り組みに精通しているわけではなく、企業の皆さんに失礼をしてしまうこともしばしばあった。

仕事の意義知った授業

うるし・しほこ 東京都内の私立中から父が理事長を務める品川女子学院中高に移り、国語教諭、副校長を経て昨年から現職。文部科学省新教育システム開発プログラム委員。

「まるで数字を押さえた。最終プレゼンで「社員の方とあらかじめ「子供の限界」を1年間接していて一番大切な設定されなかった彼らは大人ことは人への思いやりだと感じ、一部の企画は製品化され世に出ることになった。」

大きかった。一時の職場訪問や出張授業では出会えない本音のぶつかり合い、競争、方針の変更、涙を流すようないくつもの出来事乗り越え、生徒は自ら考え、自ら行動し、社会に価値を生み出すようになるようになっていった。

1年間という時間と手間と費用をかけ、協力してくださった企業の皆さんからは生徒の発想に触発され、自分たちも成長した。「初心に帰る仕事の意義を考え直した」といった言葉をいただいた。

変化は徐々に見えてきた。

教室をのぞくと皆の意見を出しやすくするため机を丸く並び、発言が滞ると小人数に分けて話し合いを進めている。会ったことのない顧客の生活や心情を想像しターゲットを絞り込み、仮説を裏付けるためネットを駆使してデータを集め、時には街頭インタビュー

学校という場所はとかく学業成績が評価軸になりがちだが、この取り組みを通して多くの子に光が当たった。チームをまとめる力のある子、プレゼン力のある子、人と違う発想のできる子、絵やデザインで才能を発揮する子、さまざまな得意分野を持つ生徒が活躍し自信をつけていった。

「仕事とは自分と人を幸せにするものだと思う」という言葉を聞き、最大の成果は、子供たちが親でも教員でもない大人と共同で一つのものを作り上げる過程を通して、職業人として仕事をする意義を実感したことだと確信した。

バーチャルでない本物のゴールを設定したことの効果もある。

「仕事とは自分と人を幸せにするものだと思う」という言葉を聞き、最大の成果は、子供たちが親でも教員でもない大人と共同で一つのものを作り上げる過程を通して、職業人として仕事をする意義を実感したことだと確信した。

バーチャルでない本物のゴールを設定したことの効果もある。

教育

毎週月曜日掲載